

歴史小説とは何か

菊地昌典

筑摩書房

歴史小説とは何か

菊地昌典

筑摩書房

菊地昌典（きくち まさのり）

1930年 東京に生まれる。

1952年 東京大学農学部 卒業

現在 東京大学教養学部助教授

専攻 ソビエト政治史，社会主義論

〔著書〕『ロシア農奴解放の研究』（1964，御茶の水書房）『人間変革の論理と実験』（1971）『増補・歴史としてのスターリン時代』（1972）『ロシア革命と日本人』（1973）『現代ソ連論』（1977）『北京新疆紀行』（1978，共著）以上筑摩書房 『1930年代論』（1973，田畑書店）『社会主義と人間』（1973）『革命と民衆』（1974，共に潮出版社）『試練にたつ社会主義』（1976，人文書院）『体験的社会主義論』（1976，毎日新聞社）『現代社会主義の論理』（1978，三一書房）など。

〔編著〕『ロシア革命』（1971）『ロシア革命以後』（1971，共に筑摩書房）『ソビエト史研究入門』（1976，東大出版会）『ロシア革命論』（1977，田畑書店）など。

〔訳書〕レーニン『国家と革命』（1966，中央公論社）など。

歴史小説とは何か

1979年10月30日 初版第1刷発行

Printed in Japan

1980年3月15日 初版第2刷発行

著 者

© 菊 地 昌 典

発行者

布 川 角 左 衛 門

発行所

株式 筑 摩 書 房

101-91

東京都千代田区神田小川町 2-8

振替東京6—4123 電話・東京(291) 7651(営業)

東京(294) 6711(編集)

1021—85152—4604

整版井村印刷・多田印刷・鈴木製本

はしがき

歴史小説は、作家の歴史観の告白にはかならない。作家が歴史の流れをどのようにとらえ、いかなる事実を史実と認識し、史実をどのように組立てて歴史小説をつくるのかは、その作品の巧拙はひとまず別としても、歴史を学ぶ者にとっては興味ある研究対象である。

つまり、作家の歴史観と、歴史家のそれとの異同を明らかにすることで、作家と歴史家のイメージ・イメージのちがいを剔抉し、そのイメージ・イメージそのものの内容を解剖することができる。

もちろん、この場合にも、作家が自分の作品を歴史小説と称する以上、一個の歴史家という人格をあわせもつことが必要であろう。ところが、歴史小説の定義と概念は現在、きわめて曖昧であり、単に過去に題材をとっただけで、歴史小説の名を冠せられている作品がはなはだ多い。

本書で、いささか執拗ともいえるほど、歴史小説を厳密な意味でとらえようと努めているのは、次の理由による。

一つは歴史小説をカテゴリーカルにとらえない場合には、いわゆる時代小説まで検討の対象にしなければならなくなり、到底、私の力にあまる仕事となってしまうこと、第二は、歴史を学ぶ者にとって、歴史小説とは何かを明確に提示することで、逆に、分化し、精密化している歴史学に、かつての歴史

と文学が渾然と一体化していた原初の時代の大切な精神の回復をよびかけたいと思ったからである。つまり、この本は、歴史小説を書く作家に対する歴史家の側からの批判であるとともに、私も含めた歴史家に対する自省を促す書であるといってもよい。いささか不遜かもしれないが、そのような意味と願いが、本書執筆の動機にこめられているのである。

第一部は、「歴史小説とは何か」と題して、雑誌「展望」（一九七四年二、三、四月号、及び一九七六年六月号）に連載したものを柱として、それに加筆したものである。第二部、第三部は、若干の部分をのぞいては、書きおろしである。

第二部は、伝記Ⅱ他伝の基礎資料となるべき自伝、日記、遺書などにおける「私」の虚構の構造を検討した。その意図は、歴史小説と歴史学の共通領域となるべき伝記Ⅱ他伝の構成に、自伝、日記類があまりにも安易に利用されてはいはしないか、と考えたからである。ここでも、事実とは何か、が一貫して私の問題意識の基底にあった。また、いづれ書きたいと思っている伝記論の下準備でもある。

第三部は、第一部、第二部をふまえた一つの結論である。私は、ここで歴史小説のあるべき姿を理念としてのべておいた。

この本を書くにあたって、実に多くの方々の研究成果を参考にさせていただいた。また、大岡昇平、色川大吉、尾崎秀樹の三氏からいただいた有形、無形の刺戟と貴重な示唆がなければ、この本は途中で筆を折っていたかも知からない。

筑摩書房編集部の間宮幹彦、勝股光政、そして本書をつくって下さった谷川孝一の諸氏、朝日新聞社の赤藤了勇氏、国会図書館の庄野新氏らの御協力も忘れがたいものである。また本書のなかで、多

くの文学作品を材料として使わせていただいた。文中では敬称を省略させていただいたが、その著者、訳者の方々にも厚く御礼を申し上げます。

一九七九年七月

練馬・石神井台にて

菊地 昌典

歴史小説とは何か
目次

第一部 歴史小説とは何か——史実と虚構の間

第一章 歴史と文学の断絶

第二章 『蒼き狼』論争

第三章 歴史小説と借景小説

第四章 事実とイマジネーション

第五章 作家の歴史観

第六章 作家の視座

第七章 史実と史実の間

第八章 「歴史其儘」考

第九章 史観をめぐる作家と歴史家

第十章 過去の再構築

第十一章 歴史小説の史観批判

第十二章 司馬遼太郎と松本清張の歴史観

第十三章 歴史家と歴史小説

173

第二部 歴史としての自伝

181

第一章 自伝と伝記の間

183

第二章 自伝の発生

208

第三章 自伝の虚構

222

第四章 日記と遺書の構造

242

第五章 無告の民の自伝

264

第六章 事実と想像の転回

282

1 『苦海浄土』考

283

2 自伝と小説の間——『安曇野』考

298

3 『隠された十字架』『水底の歌』考

315

第三部 歴史と文学の接近——結びに代えて

327

あとがき

349

ウォルター・スコット（一七七一—一八三二）以前のいわゆる歴史小説は、まさに固有の歴史性を、つまり登場人物の特殊性をその時代の歴史的特質から導き出すという歴史的観点そのものを欠いていたのである。

（ルカーチ『歴史小説論』一九三七年）

史実と虚構の間

第一部 歴史小説とは何か

第一章 歴史と文学の断絶

バターと玉子、そしてサラダとパセリがオムレツではない、とは桑原武夫が好んでつかうリットン・ストレーチイの言葉である。バター、玉子、サラダ、パセリは、この場合、「確実」な史的事実（史実）をいい、オムレツは歴史である。どんなに史的事実をつみ重ねていても、それが歴史になるものではない。その史実を料理して、オムレツにするには、芸術的直観が必要だということ、換言すれば、歴史家は詩人でなければならないとストレーチイは主張し、桑原武夫も、またそれに双手をあげて賛成しているのである。

歴史小説とは、いわば、詩人でもある歴史家の作品である。あるいは、歴史家でもある詩人の作品である。歴史と文学の自己同一性は、歴史文学、つまりは、真の歴史を書く場合の最低限の条件である。

だが、現代の歴史学は、このバター、玉子、サラダとパセリが、歴史であると誤認しすぎてはいまいか。あるいは、このバターうんぬんの史実が、腐敗、変質し、あるいはねじまげられていることに気づかず、さらには、これだけの材料ではオムレツがつかれないことがわかっていながらもかわらず、主観的料理法を喧伝して、歴史をえがこうとしているのではなからうか。

桑原が、ストレーチイの比喻をもちだしたのは、わけがある。それは、歴史から詩人的要素を脱色することが、当節はやりすぎているからである。

このことは、無限にある史実の集積がそのまま、歴史であることを意味するものではない。史実の量から質への転化が歴史を意味するものでもない。史実に加えるに、詩人的直観が、歴史には必要不可欠であることを主張しているのである。

桑原はのべている、「歴史は過去に対する考証、あるいは価値判断であると同時に、過去の再現である。歴史が教訓に資するといわれるのは専らこの点にあるのであらう。歴史によって自己反省するというのは、歴史を通じて人間が認識されるからであり、古来歴史を『かがみ』というのは、その意味でなければならない。ところで社会史、文化史といった通史も覚らしめるところは多いが、そこでは生きた個物があまりにも抽象され、無視されているから、そこから得られる反省はむしろ観念的ないわば反省の反省ともいふべきものとなり勝ちである。もっと直接的な、身にしみるような反省をつかむためには、主体性のある個体、またその個体が活躍する生きた世界、そうしたものの感覚を捉える必要がある。またそうであってこそ歴史は『かがみ』といえるのだ。」

この昭和十七年に桑原が書いたエッセイ「歴史と文学」(朝日新聞「六・二一六・二六」)は、必ずしも、バターと玉子の材料あつめに狂奔する歴史家批判だけをめざしたものではない。バターと玉子すら集めずに、ただテーマを過去に求めた安易な歴史小説に対して、一定の条件を最低限まもるように訴えたものでもあった。

「歴史小説はそこに描かるべき過去の一時代の生き生きとした感覚なくしては成立しない筈である。」

そして生き生きとした感覚をつかむためには、作者がその時代に対する相当正確な知識をもっているでなければならぬ」とは桑原の言葉である。時代から逃避するただけの歴史小説、英雄、豪傑の「偉大な固有名詞」だけをテーマとした歴史もの、あるいは、時流にのった歴史小説、すべてを桑原は批判しているのである。

この桑原の指摘から、すでに三十年以上の時空が経過したのであるが、依然として、バターと玉子の比喩は生きている。歴史と文学の関係は、まだ、なんの解決もみてはいない。

歴史家は、バターと玉子あつめに狂奔し、史実で歴史は構築しようとの幻想に酔っている。E・H・カーの大海で釣る魚のたとえを、合理化し、史実の取捨選択を歴史観というフルイにかけ、その歴史観の「神聖さ」に、手を触れようともしない。いっぽうで、歴史小説は氾濫し、その巧みな文章のはこびは、民衆を魅了している。それが、歴史小説に価するか、どうかにかかわりなく、歴史ものは、民衆によみつがれ、おのずから、その作家の歴史観は、民衆の歴史観形成に一定の役割をはたしていく。

桑原の提出した歴史精神なき歴史家、および歴史小説家への批判が、今日なお、その新鮮さをうしなわれないのは、歴史家と文学者のうめがたい亀裂がいまなお確認されるからである。歴史家は、文学者の批判に耳をかたむけないし、逆もまた真である。桑原ならずとも、民衆の歴史学を真剣に追求していった歴史家ならば、誰しもが、アカデミズムの塔奥深くに姿をかくした歴史家の「あり方」に疑問を感じたことであろう。吉川英治と交際のふかった歴史家、服部之総は、歴史小説にたいする文芸批評が歴史家の評価の高みにまで達しないのを憂えると同時に、歴史家がまた、歴史文学に関心を

もたない事をつよく批判している。

服部之総を憤慨させたものは、文壇にある「歴史小説」評価の安易さであり、それは、檀一雄の「真説石川五右衛門」に直木賞を与えた、その無神経さであった。「すくなくともいかなる意味でも歴史文学でないことだけは確実なこのマゲモノを、大衆の歴史文学の確立のため敢闘した直木の名をもつ賞にあてられて、地下の直木はたして苦笑していないであらうか。」

服部のこの言葉は、一九七〇年代の今日、奇異にすら感じられる。なぜなら、歴史家が、直木賞の歴史文学ものに口をさしはさむことすら、今の歴史家には、たえてないことだからである。服部が、この「歴史文学あれこれ」を「改造」に書いたのは、一九五二年三月のことであった。

現在はどうか。多くの歴史家は、致々として専門の分野で、業績をあげているのであろうか。そうではあるまい。司馬遼太郎をよみふけり、松本清張に没頭する。そして、本当に、巻おくあたわず、一気によみ通し、充実感をおぼえる。そして、歴史ものは、かくあらねばならないな、と後ろめたさを感じる。だが、歴史家は、絶対に、この歴史小説を歴史家として批評はしない。それは、歴史小説であって、歴史ではない、としりぞける。フィクションとノン・フィクションは質的にちがう。われわれのやっているのは、史実にもとづく歴史である。司馬・松本の歴史小説は、酒肴の座に興される物識りの材料にはなっても、歴史家は、歴史家の立場から歴史小説を批評しようとはしない。民衆に愛読され、彼らの歴史観が、それによって作られていようと、その事には一切、無関心である。否、無関心をよそおっている。

服部之総は、文壇における歴史を知らぬ歴史離れの作品が、歴史文学のレッテルをはられて横行し

ているさまに耐えられなかった。同時に、歴史家が、なぜ歴史文学を批評しないのかとも叫ばざるをえなかった。彼は、歴史と文学の關係に橋を架ける義務を、文壇と歴史学界、双方に課そうとしたのである。「だが、ここで云いたいのは、歴史家の歴史文学批判が今後もつとさかんに、全面的に、すべての作家と作品にわたって行われてほしいということである。と同時に、文壇でも、歴史家の批判と涉り合つてほしいことである。」（『歴史文学あれこれ』『明治維新史』所収）

この服部の発言からも、すでに二十年余り過ぎてしまった。そして、いま、われわれ歴史家の側から、この服部の思想に応えた片鱗だにうかがうことができないのを知っている。これを歴史学の進歩というるか。はたまた退歩というべきか。

しばしば、話題となる「歴史と文学」のテーマは、永劫にまじわることのない相対立するカテゴリとして考えられやすいが、かつては、歴史は文学であり、文学もまた歴史であった。この事は、すでに多くの人々によって指摘されている。

桑原武夫は、前述したバターと玉子の理論をもちだした六年後、一九四八年、同題の「歴史と文学」というエッセイで、故狩野直喜先生の言葉を引いている。それは、古代の歴史書が文学の書であることを現代の研究者は忘却して、『史記』や『漢書』から史料だけをさがし出そうとすることをいましめたものであった。

桑原が、文学的把握力を歴史家の一資格であると主張したのは、理由のないことではない。その言外に、科学的客観主義が、幻想にすぎず、史観そのものが、もともと主観的な価値判断をふくむという当然の事を語っているのである。そして、「日本では素朴な科学主義によって文学を排除するあま

り、このサイエンチフィック・イマジネーションを忘れすぎた点があったのではないかと思います」とのべている。このイマジネーションとは、桑原によれば、空想力ではなく、史実を基礎においた「構想力」ともいうべきものをさしている。そして、この考えの底部には、歴史とはバターと玉子というような史実の一面性、不完全性、あるいは、各種材料をかきあつても、そのままではオムレツにはなりえない、歴史家の創造的構想力によって体系づけられることが必要であることを主張しているのである。

歴史にイマジネーションの復活がおこなわれるとき、歴史家は、創造的イマジネーションによってたつところの文学への親近感を回復できるであろうし、「もつともそのことは、歴史に科学であることを止めよという意味では決してないので、歴史はあくまで過去の人生を概念的にとらえる科学であり、文学は人生を直接感覚にうったえる形において表現する芸術」（『歴史と文学』『事実と創作』所収）であることを否定するものではない。

歴史と文学の断絶が、今日、その極点に達していることは、否定できない事実である。

そして、その両者の論争は、たえてなく、むしろ歴史家の歴史小説家への讃美、あるいは無条件降伏に終始しているのが、まさしく現代の特徴であるというべきであらう。

十数年まえ、空前の歴史ブームがあった。そのとき、歴史家の書く文章が、ことごとく専門編集者にリライトされたという噂がとびかった。あまり、そういうことに関心のない私の耳にまで、それは入ってきたものだ。この頃から、歴史家は材料をあつめ、それを作家に提供するような風潮がうまれ